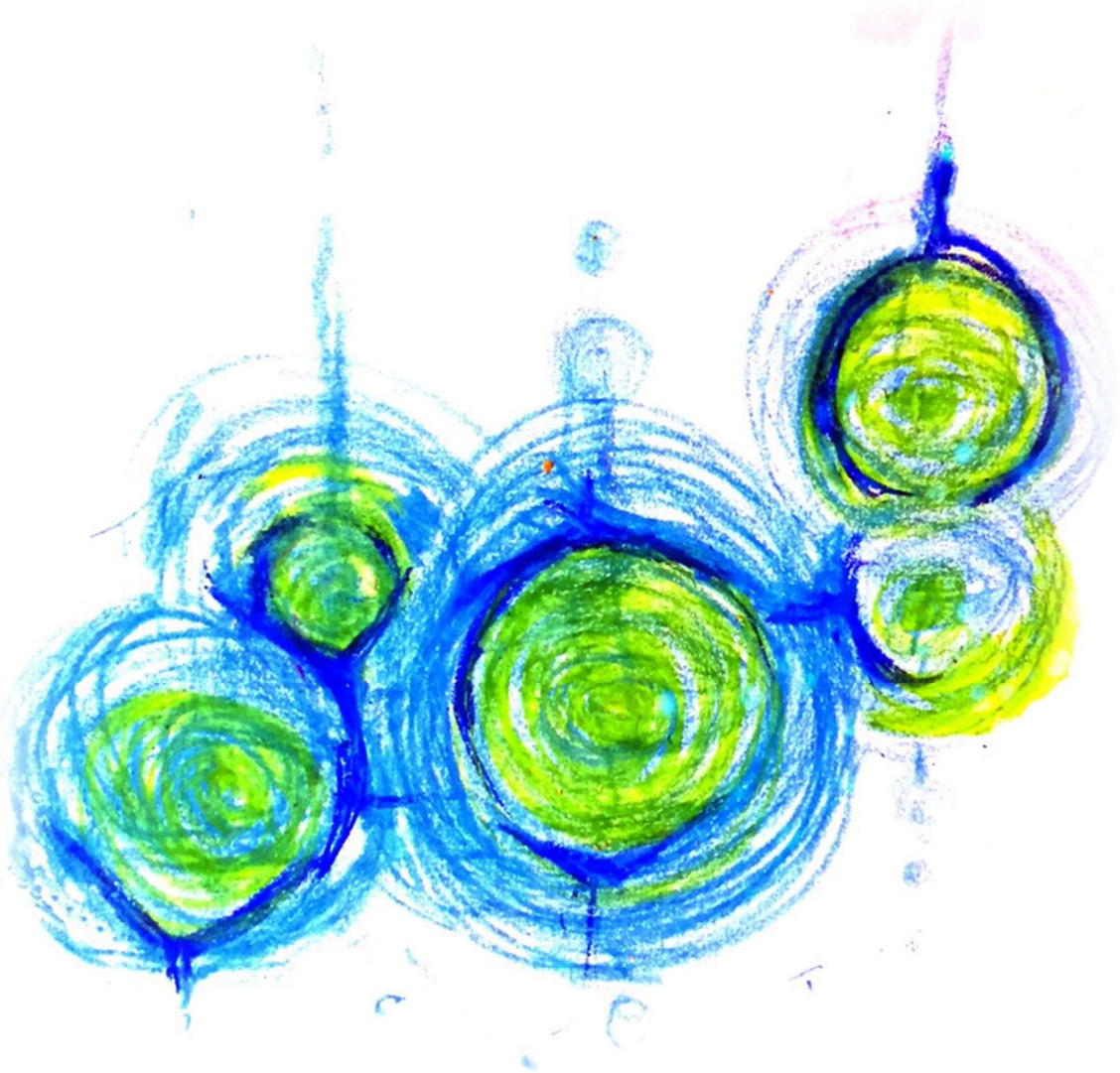
Total Rehabilitation Research

Printed 2018.0630 ISSN2189-4957
Published by Asian Society of Human Services

June 2018
VOL. 6



Mamiko OTA
[Physalis alkekengi]

Asian Society of Human Services

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

ORIGINAL ARTICLE

切れ目のないキャリア教育のための評価尺度 (Scale for Coordinate Contiguous Career: Scale C^3) の内容的妥当性の検証

沼館 知里 [1)2)]　照屋 晴奈 [3)]　梅田 真理 [4)]　韓 昌完 [3)*]

1) 琉球大学大学院教育学研究科
2) 沖縄県立鏡が丘特別支援学校
3) 琉球大学教育学部
4) 宮城学院女子大学教育学部

＜Key-words＞
キャリア教育，Inclusive Needs Child(IN-Child)，Scale C^3，内容的妥当性，専門家調査

*責任著者: hancw917@gmail.com（韓 昌完）

Total Rehabilitation Research, 2018, 6:33-44. © 2018 Asian Society of Human Services

Received
May 14, 2018

Revised
June 6, 2018

Accepted
June 12, 2018

Published
June 30, 2018

Ⅰ. 研究背景と目的

義務教育段階を卒業した後の発達障害を含む包括的な支援を必要とする人々の増加は、高等学校、高等教育機関、職場等で様々な課題となっている(韓・沼館・呉屋ら、2018)。小中学校において、このような児童生徒の実態を把握し、支援を行うためのツールとしてIN-Child Recordが既に開発されているが(韓・太田・權, 2016)、義務教育段階を卒業した後にそれぞれの進路に進んだ人々を対象として実態を把握し、継続的支援を行うためのツールは見当たらなかった(韓・沼館・呉屋ら, 2018)。そこで韓・沼館・呉屋ら(2018)は高校生以上を対象とした新たなツールとして、「切れ目のないキャリア教育のための評価尺度」(Scale for Coordinate Contiguous Career；Scale C^3)を開発した。これは「パーソナリティ」と「キャリア」の大きな2領域に分けられ、「パーソナリティ」領域には、「姿勢・運動・動作」、「メンタルヘルス」、「不注意」、「多動性・衝動性」、「こだわり」、「自己肯定感」の下位領域を持つ。「キャリア」領域には、「人間関係形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応基礎能力」、「キャリアプランニング能力」の下位領域を持つ。さらに各領域について、「人間関係形成能力」には「多様性の理解」、「コミュニケーション・スキル」、「ソーシャル・スキル」、「自己理解・自己管理能力」には「自己の役割の理解」、「自己の動機付け」、「ストレス耐性」、「課題対応基礎能力」には「情報取得」、「情報表出」、「情報処理」、「キャリアプランニング能力」には「意思決定」、「将来設計」の下位領域を持つ。全ての下位領域に含まれる項目の合計は100項目となる。IN-Child Recordと同様に、評価は「1＝非常にあてはまる」、「2＝

少しあてはまる」、「3＝どちらでもない」、「4＝ほとんどあてはまらない」、「5＝まったくあてはまらない」の 5 件法で行われる。点数は下位領域ごとに合計され、領域点数が低いほどその下位領域に対するニーズが高いという評価になる(韓・沼館・呉屋ら、2018)。しかし、Scale C³は信頼性・妥当性が検証されていない試案の段階のツールであり(韓・沼館・呉屋ら、2018)、Scale C³の各領域と項目に対する多分野の専門家や、現場の専門職員に対して、内容的妥当性を検証することが必要である(韓・沼館・呉屋ら, 2018)。よって、本研究では韓・沼館・呉屋ら(2018)によって開発された Scale C³の内容的妥当性の検証を行い、最終的な試案を完成させることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 内容的妥当性の検証

開発された尺度の試案に対する内容的妥当性の検証のために、Scale C³の評価者として想定される専門家に対して質問紙を用いたアンケートを実施する。調査対象者は、高等学校の教員、高等教育機関における障害学生支援担当者、一般企業における社員および産業医とした。アンケートでは、Scale C³の各領域・各項目の内容及び構成が妥当であるかを 4 件法で尋ねた。調査期間は 2018 年の 1～2 月とした。

1) 高等学校での内容的妥当性の検証

2018 年 1 月に、現場の教員 25 名に対して Scale C³の説明を行い、その上で Scale C³の各領域・各項目が妥当であるか質問紙を用いて尋ねた。質問紙について、回答は「きわめて妥当である」、「妥当である」、「妥当でない」、「きわめて妥当でない」の 4 件法で求めた。

2) 高等教育機関での内容的妥当性の検証

2018 年 2 月に、大学の障害学生支援室の職員 6 名に対して質問紙を郵送し、Scale C³の各領域・各項目が妥当であるか尋ねた。質問紙について、回答は「きわめて妥当である」、「妥当である」、「妥当でない」、「きわめて妥当でない」の 4 件法で求めた。

3) 企業での内容的妥当性の検証

2018 年 2 月に、企業に勤める 3 名と産業医 1 名に対して質問紙を郵送し、Scale C³の各領域・各項目が妥当であるか尋ねた。質問紙について、回答は「きわめて妥当である」、「妥当である」、「妥当でない」、「きわめて妥当でない」の 4 件法で求めた。

2. 専門家協議による項目の修正

内容的妥当性の検証結果をもとに、特別支援教育の研究者の協議をもとに Scale C³の各項目の修正を行う。

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

Ⅲ. 結果

1. 高等学校での内容的妥当性の検証

高等学校での質問紙の回収率は96.0%(25名中24名)であり、このうち有効回答率は62.5%(24名中15名)であった。高等学校における回答者の属性を表1に示す。

表1　回答者の基本属性(高等学校)

基本属性	結果
平均年齢	41.6±7.9歳　(不明1名)
男女比	男性8名(53.3%) 女性7名(46.7%)
平均通算教職経験年数	16.7±8.5年
平均特別支援学校経験年数	0.0年
平均特別支援学級通算教職経験年数(経験者のみの平均年数)	9.5年 (2名のみ経験者、1名1.0年　1名18.0年)
特別支援学校教諭免許状保有の有無	免許保有者2名(13.3%) 非保有者13名(86.7%)

2. 高等教育機関での内容的妥当性の検証

高等教育機関での質問紙の回収率は100%(6名中6名)であり、全てが有効な回答であった。高等教育機関における回答者の属性を表2に示す。

表2　回答者の基本属性(高等教育機関)

基本属性	結果
平均年齢	37.3±6.1歳
男女比	男性1名(16.7%)　女性5名(83.3%)
臨床心理士平均経験年数 (経験者のみの平均年数)	7.9年±5.5年 (3名のみ経験者、平均値は経験者のみの値)
特別支援教育士平均経験年数 (経験者のみの平均年数)	10カ月 (1名のみ経験者)
その他関連職種平均経験年数 (経験者のみの平均年数)	10.6年±5.6年 内訳：特別支援教育相談1名(12.4年) スクールカウンセラー1名(15.0年) 臨床発達心理士1名(1.1年) 軽度発達障害NPO支援スタッフ(11.7年) 校外通級教室(大学研究所)支援・指導員(2.2年)
平均現職在職期間	1.0年±0.5年

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

3. 企業での内容的妥当性の検証

企業での質問紙の回収率は 100%(4 名中 4 名)であり、全てが有効な回答であった。企業における回答者の属性を表 3 に示す。

表 3 回答者の基本属性(企業)

基本属性	結果
平均年齢	39.0±5.1歳
男女比	男性2名(50.0%)　女性1名(25.0%) 不明1名(25.0%)
産業医平均経験年数	14.0年 (1名のみ経験者)
心理カウンセラー平均経験年数	0.0年
その他関連職種平均経験年数	0.0年
平均現職在職期間	14.4年±6.7年

1) 領域別の結果

全ての領域で「妥当である」または「きわめて妥当である」との回答が得られ、内容的妥当性が検証された。意見等は表 4 の通りであった。

表 4　領域別の意見等

領域		意見等
質問2	パーソナリティ領域	• 「姿勢・運動・動作」の領域について、何の傾向が見て取れるのかよく分からない。 • 「不注意」という表現はネガティブなイメージがあるため、「注意性」等 • の表記にした方がよいのではないか。 • 「姿勢・運動・動作」と「不注意」が重なる部分があるのではないか。 • パーソナリティ領域に「姿勢・運動・動作」の領域が含まれていることに多少違和感がある。パーソナリティ領域に「コミュニケーション能力」等の社会性に関する領域を設定した方がよいのではないか。 • 「姿勢・運動・動作」について、発達障害傾向や発達障害の疑いのある学生や成人の場合、このような問題が目立つことはあまりないと思う。 • 発達的変容を土臺用に扱うのかが見えてこないため、判断がつかない。 • コミュニケーション能力などの社会性をアセスメントする項目が入るとよいのではないか。 • 「自己肯定感」の質問項目が一般的な質問項目と異なるように感じる。 • 「メンタルヘルス」の名称は「精神安定感」等疾患色が強く出ない表現の方がよい。 • 思春期特有の不安定さ等も広く評価するのか、発達段階に応じて分けて捉えるのか、線引きが難しい。 • 「姿勢・運動・動作」に関して、教育課程にある対象者であれば違和感はないが、就労者に対しては本人の特性に関した配慮ではなく、職場からの排除や障害者雇用枠への転換を促すために利用される懸念がある。 • 「メンタルヘルス」に関して、本人の生活や環境等複雑に絡むため既存のチェックリストで評価するべきである。
質問3-1	人間関係形成能力領域	• コミュニケーション・スキル領域について、本人が回答するのは難しいのではないか。 • 「コミュニケーション・スキル」と「ソーシャル・スキル」との明確な違いが知りたい。 • どこかの領域の項目に「感情のコントロールができない」という内容を追加するとよいのではないか。 • 「多様性の理解」「コミュニケーション・スキル」「ソーシャル・スキル」の領域が何を基準に分けられているのか不明確な印象を受ける。 • 「多様性の理解」の意味合い（LGBT等）と定義が一致していない印象を受ける。 • 「ソーシャル・スキル」に「コミュニケーション・スキル」が包括されると思う。
質問3-2	自己理解・自己管理能力領域	• 自己評価無しでは「自己の役割の理解」や「自己の動機付け」、「ストレス耐性」の評価は困難であると思う。 • 自己管理の領域に時間や物の管理の項目も必要ではないか。 • 「自己の役割の理解」＝「社会への帰属意識」は同義であるのか。 • 「自己理解・自己管理能力」の下位領域としての設定が適切だと考えることができない。 • 定義と設問の内容(最終的な到達目標)の飛躍を感じる。 • 「ストレス耐性」の質問項目が一般的な質問項目と異なるように感じる。 • 「自己の役割の理解」に関して、企業では質問項目をそのまま使用するのは困難であるように思う。 • 「ストレス耐性」に関して「メンタルヘルス」と重複するのではないか。
質問3-3	課題対応基礎能力領域	• 「情報表出」や「情報処理」に「情報」という文言は不要ではないか（「情報表出」→「自己表現の表出」「情報伝達の方法」、「情報処理」→「推論」「論理的思考力」） • 質問項目が企業向きでない表現がある。 • 就労者を対象とした場合、3つの下位領域では不足していると思う。「課題の発見」「計画立案」「実行力」といった能力も求められるため、それらについて評価する領域も必要だと感じる。
質問3-4	キャリアプランニング能力	• 「将来設計」において、自分の将来の計画を立てることと、他者に相談することは発達障害の特性を持つものにとって別次元の課題であると思う。 • キャリアプランニング能力には「情報リテラシー」に関する能力も必要だと思う。

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

2) 項目別の結果

全 100 項目中、92 項目で 90%以上から「妥当である」または「きわめて妥当である」との回答が得られ、内容的妥当性が検証された。「妥当である」または「きわめて妥当である」の回答が 80%を超えていなかった項目については、表 5 の通りであった。また、各項目についての意見等は表 6-1、表 6-2 の通りであった。

表 5　「妥当である」と「きわめて妥当である」の回答が 80%を超えていなかった項目

領域		項目		回答の分布(n=25)				
				「妥当である」または「きわめて妥当である」に回答(%)		「妥当でない」または「きわめて妥当でない」に回答		未回答(%)
				「きわめて妥当である」に回答(%)	「妥当である」に回答(%)	「妥当でない」に回答(%)	「きわめて妥当でない」に回答(%)	
パーソナリティ	姿勢・運動・動作	Q2	日常生活の中でバランスをくずしやすい	15人(60%)		10人(40%)		0人(0%)
				5人(20%)	10人(40%)	8人(32%)	2人(8%)	
		Q3	立ち上がったり、座ったりするときにバランスをくずしやすい	14人(56%)		11人(44%)		0人(0%)
				7人(28%)	7人(28%)	11人(44%)	0人(0%)	
		Q4	片足立ちができない	15人(60%)		10人(40%)		0人(0%)
				4人(16%)	11人(44%)	10人(40%)	0人(0%)	
		Q5	早く歩いたり、走ったりするとつまずきやすい	17人(68%)		8人(32%)		0人(0%)
				6人(24%)	11人(44%)	8人(32%)	0人(0%)	
		Q7	走っていて急に止まれない	17人(68%)		8人(32%)		0人(0%)
				7人(28%)	10人(40%)	8人(32%)	0人(0%)	
		Q8	傾斜やでこぼこ道など様々な状況に応じた体の使い方ができない	19人(76%)		6人(24%)		0人(0%)
				7人(28%)	12人(48%)	6人(24%)	0人(0%)	
	メンタルヘルス	Q18	ほとんどものを食べず、食べるのは極めて強く食べようと努めたり、誰かに食べるよう説得させられた時である	16人(64%)		9人(36%)		0人(0%)
				6人(24%)	10人(40%)	9人(36%)	0人(0%)	
		Q19	普段と比べて、常に食べる回数が多かったり量が多かったりする	16人(64%)		9人(36%)		0人(0%)
				5人(20%)	11人(44%)	9人(36%)	0人(0%)	

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

表 6-1 各項目に対する意見

	領域	項目		意見等
パーソナリティ	姿勢・運動・動作	Q2	日常生活の中でバランスをくずしやすい	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。 ・項目の意図がよく分からない。
		Q3	立ち上がったり、座ったりするときにバランスをくずしやすい	・項目の意図がよく分からない。
		Q4	片足立ちができない	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。 ・項目の意図がよく分からない。 ・片足立ちができないことが就業・キャリアにどのように影響するのかイメージしづらい。
		Q5	早く歩いたり、走ったりするとつまずきやすい	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。 ・項目の意図がよく分からない。
		Q7	走っていて急に止まれない	
		Q8	傾斜やでこぼこ道など様々な状況に応じた体の使い方ができない	
		Q9	物を運んでいるときに、物を落としやすい	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
	メンタルヘルス	Q11	持続する倦怠感や疲労感が見られる	・「持続する」という文言が気になる。
		Q12	気が沈んだり、気が重くなることがある。	・どのくらいの頻度なのかよく分からない。
		Q13	普段は無気力な状態だが、好きなことや都合のいいことがあると積極的に活動する様子が見られる	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
		Q16	普段なら興味を持つことに関心がない	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。 ・意味がよく分からない。 ・「普段」の様子がよく分からない。 ・「いつもなら興味を持つことに今は関心が持てない」という意味なのか。質問の意図がわかりづらい。
		Q17	ちょっとしたことで腹がたったりいらいらすることがある	・どのくらいの頻度なのかよくわからない
		Q18	ほとんどものを食べず、食べるのは極めて強く食べようと努めたり、誰かに食べるよう説得させられた時である	・「強く」という文言が気になる。 ・第三者が見とるのは難しいのではないか。 ・生徒の食事の様子を見る機会がほとんどない。 ・質問の意味がよく分からない。 ・評価しづらいと思う。 ・生活スキルであると思う。
		Q19	普段と比べて、常に食べる回数が多かったり量が多かったりする	・表現がわかりづらい。 ・「普段」「常に」という文言が気になる。 ・第三者が見とるのは難しいのではないか。 ・「普段」の様子がよく分からない。 ・生徒の食事の様子を見る機会がほとんどない。 ・質問の意味がよく分からない。 ・評価しづらいと思う。 ・生活スキルであると思う。
	不注意	Q24	面と向かって話しかけられているのに、聞いていないように見える	・「見られる」の方が適切ではないか。 ・「感じる」「見えるといわれる」の方が適切ではないか。 ・「聞いていないように見えると言われる」という表現の方がよいのではないか。
		Q25	集中して努力を続けなければならない課題を避ける	・「課題を避けることが多い」という表現の方がよいのではないか。
		Q26	課題や活動を順序立てて行うことが難しい	・段取りする力と不注意は少しずれているように思う。
		Q27	指示に従えず、また仕事を最後までやり遂げない	・「やり遂げられない」という表現の方がよいのではないか。
	多動性・衝動性	Q29	授業中又は会議中などの座っていなければならない場面で、席を離れてしまう	・「会議中」という文言がよく分からない。
		Q32	質問が終わる前に出し抜けに答えてしまう	・「出し抜け」の意味が分からない人もいるのではないか。
	こだわり	Q35	とても得意なことがある一方で、極端に不得手なものがある	・「不得手」という表現がしっくりこない。 ・「苦手」という表現の方がよいのではないか。
		Q38	自分なりの独特な日課や手順があり、変更や変化を嫌がる	・「嫌がる」という文言が気になる。
	自己肯定感	Q40	行動を起こす前に、周囲の人に頻繁に確認する	・自己肯定感(本人の感覚)と各項目の関連 因果関係が分かりづらい。 ・状況や文脈によって意味合いが変わるため評価の解釈が難しい。
		Q41	自分から周囲の人に関わろうとしない	・自己肯定感(本人の感覚)と各項目の関連 因果関係が分かりづらい。 ・状況や文脈によって意味合いが変わるため評価の解釈が難しい。
		Q42	出来なかったことに取り組む姿勢が見られない	・「見られない」という文言が気になる。 ・「取り組むことができない」という表現の方がよいのではないか。 ・自己肯定感(本人の感覚)と各項目の関連 因果関係が分かりづらい。
		Q43	新しいことが出来ても、嬉しそうな表情を見せない	・「嬉しくならない」のという表現の方がよいのではないか。 ・「嬉しそうな表情をしない」という表現の方がよいのではないか。 ・自己肯定感(本人の感覚)と各項目の関連 因果関係が分かりづらい。 ・状況や文脈によって意味合いが変わるため評価の解釈が難しい。
		Q44	肯定的な言葉かけをしても、気持ちが安定しない	・「言葉かけをしても」という文言が気になる。 ・「相手を認めるような言葉かけ」という表現の方がよいのではないか。 ・「気持ちが安定しない」を「嘘をついているようで」「自分の気持ちとは違うようで」というような表現のあとに続けて具体的に示した方がよいのではないか。不安定の内容が見えないと答えづらいのではないか。 ・「肯定的な言葉をかけられても」という表現の方がよいのではないか。 ・自己肯定感(本人の感覚)と各項目の関連 因果関係が分かりづらい。

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

表 6-2 各項目に対する意見

	領域		項目		意見等
キャリア	人間関係形成能力	多様性の理解	Q47	異なる年代の人と話をしようとしない	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
		コミュニケーション・スキル	Q51	会話の仕方が形式的であり、抑揚なく話したり、間合いが取れなかったりすることがある	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。 ・「形式的」は「単調」という表現の方がよいのではないか。 ・「抑揚なく」は「淡々と」という表現の方がよいのではないか。
			Q53	適切なコミュニケーション手段を選択・表現できない	・想起がしづらい質問である。 ・意味がよく分からない。
			Q55	話すときに、音の入れ替えや、音の誤りがある	・「音の入れ替え」や「音の誤り」という文言がどのようなものかイメージがつきづらい。「言い間違える」という意味なのか?
		ソーシャル・スキル	Q58	毎日のように遅刻・早退している	・「遅刻・早退が多い」「遅刻・早退を繰り返す」といった表現の方がよいのではないか。 ・生活についてのスキルは他の項目にもあるように思う(例：身だしなみ、食事、睡眠、薬の管理、通院)。
			Q60	他の人と意見が衝突したときに、折り合いをつけることができない	・「折り合い」という表現ではなく、「双方の意見の良いところを取り入れて意見をまとめることができない」というように具体的に説明した方がよいのではないか。
	自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解	Q61	係や委員の仕事に積極的に参加することができない	・「参加しない」といった表現の方がよいのではないか。 ・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
		自己の動機付け	Q64	本人のやりたいことが見つからない	・「自分」という表現の方が適切ではないか。 ・「自分」という表現の方が適切ではないか。 ・「やりたいことが何か分からない」という表現の方がよいのではないか。
			Q65	目標達成のためであっても、困難な事柄には取り組めない	・「ストレス耐性」と似ているように思う。
			Q66	自ら始めたことでも、うまくいかないとやめてしまう	・「ストレス耐性」と似ているように思う。
		ストレス耐性	Q68	悩んだり葛藤したりする状況で落ち着いていられない	・「状況では」の方が適切ではないか。
			Q69	ストレスを受けた状況で、自分で解決する手段を持っていない	・「手段を持っていない」ではなく「難しい」という表現の方が適切ではないか。 ・リラクゼーションスキルの有無は必要があるのか。
	課題対応基礎能力	情報取得	Q73	話し合いが難しい	・大事な項目であると思うが、「情報収得」ではないと思う。
			Q75	頻繁に使う語でも、間違えて読む	・大事な項目であると思うが、「情報収得」ではないと思う。
			Q76	読み上げる際、促音や拗音などの特殊音節(「きって」の「っ」や、「きょう」の「ょ」といった音)を読み間違える	・大事な項目であると思うが、「情報収得」ではないと思う。
			Q77	文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする	・大事な項目であると思うが、「情報収得」ではないと思う。
			Q78	読み上げが遅い	・「読み上げ」という文言が気になる。
		情報表出	Q80	ことばを想起するのに時間がかかったり、ことばにつまったりする	・「想起する」ではなく「思いつく」という表現の方がよいのではないか。
			Q81	単語を羅列するなど、短い文で内容的に乏しい話をする	・「乏しい」という文言が気になる。 ・「羅列する」ではなく「ならべる」という表現の方がよいのではないか。
		情報処理	Q87	簡単な計算が暗算でできない	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
			Q88	計算をするのにとても時間がかかる	・授業以外の場面でなければ分からない項目であると考える。
			Q90	図形を構成、分解、模写することが難しい	・「構成」の意味がよく分からない。
	キャリアプランニング能力	意思決定	Q95	条件や選択肢がないと意思決定することができない	・条件や選択肢は支援者が提示した方がよいと思う。他の項目に比べて難しいように思う。
		将来設計	Q97	見通しをもってそれに向けた準備をすることができない	・「将来設計」より「計画実行能力」という印象を受ける。
			Q98	何かを始めるときに、計画を立てて行うことができない	・「将来設計」より「計画実行能力」という印象を受ける。 ・段取りする力のことか。
			Q99	有線順位をつけて取り組むことができない	・「将来設計」より「計画実行能力」という印象を受ける。 ・段取りする力のことか。

4. 全体に対する意見等

高等学校、大学の障害学生支援室、企業から寄せられた Scale C[3] 全体に関する意見等に関しては、表 7 の通りであった。

表 7　Scale C³ 全体に関する意見等

	Scale C³全体への意見等
高等学校	・質問が多く、領域も細かく分けられているため、実際に使用数する前にそれらについて勉強しなければならないという気持ちになった。何度も繰り返し研修を受ける必要性を感じた。 ・全体的に難しい単語や語句が多い。生徒側の立場か外部からの立場か、混同した語句であったため、教師側、生徒側の区別をした方がよい。 ・一人でスケーリングできない時・できない項目がある。その際は、他の先生との協議が必要であると思う。 ・全体的に難しい言葉や言い回しが多いと感じる。可能であれば、小学生用、中学生用。高校生用、社会人用と対象を分けて、表現をそれぞれ変えて作成した方がよいのではないか。本アンケートを本校で実施するのであれば、言葉が難しく大変な作業になると思う。 ・カリキュラムに合わせた教育ではなく、生徒に合わせた教育という考え方に賛成である。カリキュラムが生徒の負担になってしまっているのではないかと感じることが多々ある。教科指導だけでなく。生徒指導や進路指導においても、生徒一人一人に合わせた対応ができるように教師がしっかりと意識を持つべきである。
高等教育機関	・「切れ目のないキャリア教育」という表現では、誰を対象にする尺度なのか分かりづらい。 ・項目の中に対象者がイメージしづらいものがあった。 ・各項目のバランスに疑問を感じる。 ・自己評価するのか他者評価するのか分かりづらい。 ・質問に否定的な表現の項目が多く、弱い特性評価に焦点化されているように感じた。 ・学生対象であれば、部活動やサークル活動に関する項目が必要であると思う。
企業	・対象者のライフステージに応じた尺度が必要であると考える。

5. 専門家協議による項目の修正

高等学校、大学の障害学生支援室、企業での内容的妥当性の検証を通して得られた意見等を参考に、専門家協議をもとに Scale C³ の各項目の表現や内容の修正が行われ(表 8)、最終的な Scale C³ の試案を作成した(図 1)。

Scale C³(最終試案)は「パーソナリティ」と「キャリア」の大きな 2 領域に分けられ、「パーソナリティ」領域には、「心と体の健康」、「不注意」、「多動性・衝動性」、「こだわり」、「自己肯定感」の下位領域を持つ。「心と体の健康」とは、個人の環境内で機能する能力に寄与する生物学的・心理学的又は社会的要因も含む心と体の状態(Manwell LA et al., 2015 の定義を再構成)のことである。これは心と体は相互依存的関係であるという「心身相関」の考え方をもとに設定した(太田・沼館・金ら, 2017)。この領域は内容的妥当性が得られなかった「姿勢・運動・動作」と「メンタルヘルス」に替わり新たに設定した。「キャリア」領域には、「人間関係形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応基礎能力」、「キャリアプランニング能力」の下位領域を持つ。さらに各領域について、「人間関係形成能力」には「多様性の理解」、「コミュニケーション・スキル」、「ソーシャル・スキル」、「自己理解・自己管理能力」には「自己の役割の理解」、「自己の動機付け」、「ストレス耐性」、「課題対応基礎能力」には「情報取得」、「情報表出」、「情報処理」、「キャリアプランニング能力」には「意思決定」、「将来設計」の下位領域を持つ。

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

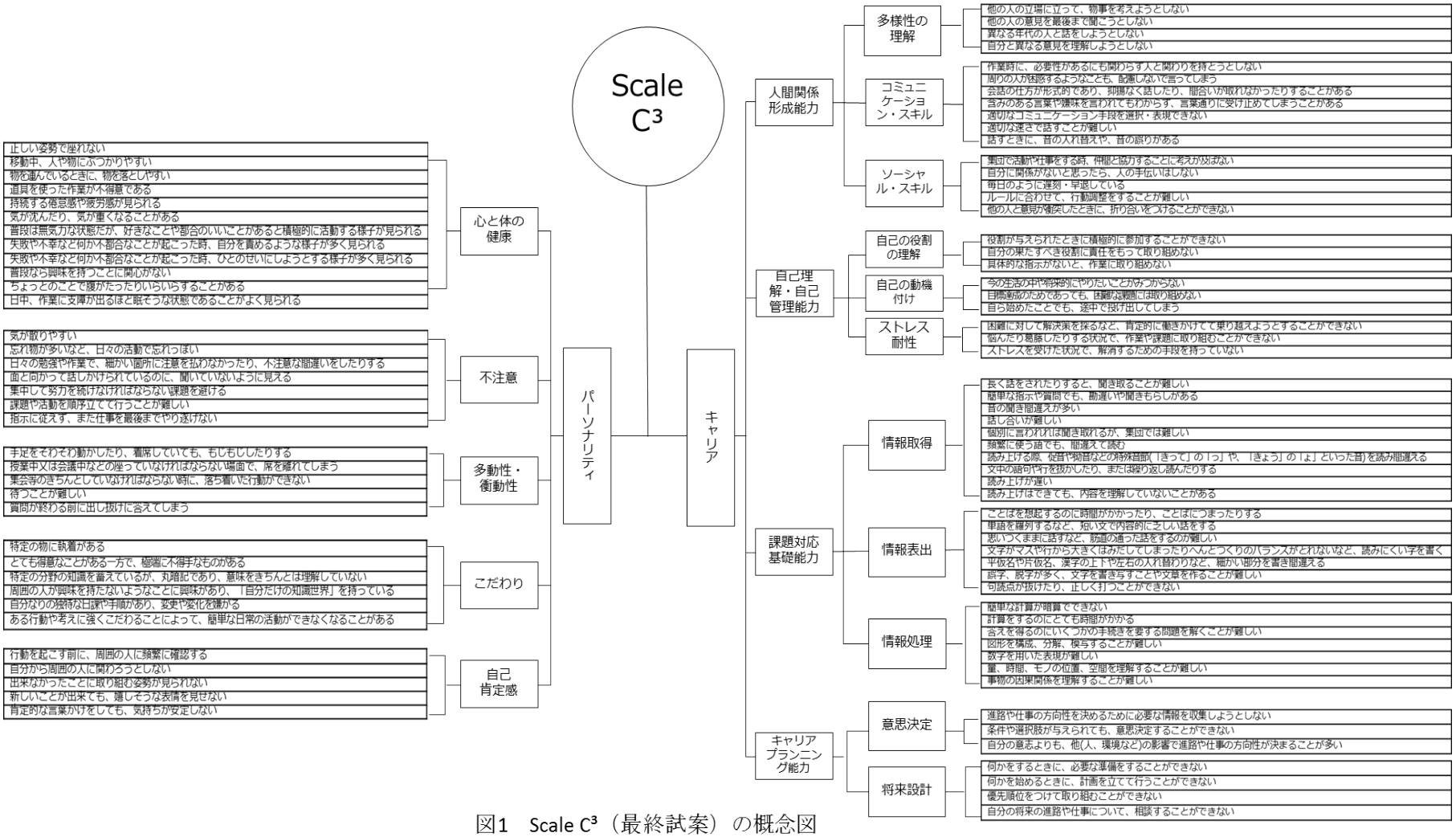


図1　Scale C³（最終試案）の概念図

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

表 8　Scale C³の内容及び言葉の表記に関する専門家協議結果

			修正前の項目	指摘内容	修正後の項目
自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解	Q53	係や委員の仕事に積極的に参加することができない	高校生だけでなく社会人も対象であるため、「係や委員」という具体的な役割を示す文言を限定しない方が分かりやすいのではないでしょうか。	役割が与えられたときに積極的に参加することができない
	自己の動機付け	Q56	本人のやりたいことが見つからない	「やりたいこと」では抽象的すぎて評価しにくいのではないでしょうか。	今の生活の中や将来的にやりたいことがみつからない
		Q57	目標達成のためであっても、困難な事柄には取り組めない	「事柄」は内容や様子という意味を持ち、「課題」は解決しなければならない問題という意味を含み、目標達成のためとなると「課題」の方が適しているのではないでしょうか。また教育現場で使用する際は「課題」の方が理解しやすいのではないでしょうか。	目標達成のためであっても、困難な課題には取り組めない
		Q58	自ら始めたことでも、うまくいかないとやめてしまう	最後までうまくいくか、いかないかなど、達成度を評価する項目に捉えられてしまうのではないでしょうか。	自ら始めたことでも、途中で投げ出してしまう
	ストレス耐性	Q59	困難を乗り越えるために努力することができない	「努力」は評価しにくいのでは。文科省の定義の「自己理解・自己管理能力」の「肯定的な理解」の観点を入れ、肯定的に困難を乗り越えるという表現が必要ではないでしょうか。	困難に対して解決策を探るなど、肯定的に働きかけてて乗り越えようとすることができない
		Q60	悩んだり葛藤したりする状況で落ち着いていられない	悩んだり葛藤する場面で落ち着くことは誰でも難しいため、その状況の中でも、作業や課題に取り組むことができるかを評価する表現に変えるのはどうでしょうか。	悩んだり葛藤したりする状況で、作業や課題に取り組むことができない
		Q61	ストレスを受けた状況で、自分で解決する手段を持っていない	ストレスを受けた状況では「解決」ではなく、「解消」という文言の方が適切ではないでしょうか。	ストレスを受けた状況で、解消するための手段を持っていない
キャリアプランニング能力	意志決定	Q87	条件や選択肢がないと意思決定することができない	選択肢を自ら探し、その上で意思決定ができるか否かを評価する、高度な項目と捉えられてしまうのではないでしょうか。	条件や選択肢が与えられても、意思決定することができない
		Q88	自分の努力や能力よりも、他（人、環境など）の影響で進路や仕事の方向性が決まることが多い	自らの能力を理解した上で自己判断をできているか否かを評価する、高度な項目と捉えられてしまうのではないでしょうか。	自分の意志よりも、他(人、環境など)の影響で進路や仕事の方向性が決まることが多い
	将来設計	Q89	見通しを持ってそれに向けた準備をすることができない	全体的に抽象的な表現であるため、評価しづらく、どこまで準備できているかの度合いを評価する項目と捉えられるのではないでしょうか。	何かをするときに、必要な準備をすることができない
		Q92	自分の将来について、目的に合わせて相談相手を決め、相談することができない	1つの項目に「目的に合わせて相手を選ぶことができるか」「将来について相談できるか」の2つの問いが入っており、将来設計の観点でいうと、後者がメインとなるのではないでしょうか。	自分の将来の進路や仕事について、相談することができない

Ⅳ 考察

本研究では高等学校、高等教育機関、企業において Scale C³の内容的妥当性を検証した。その結果、各領域においては、全ての領域において 80%以上の回答者が「妥当である」または「きわめて妥当である」との回答が得られ、内容的妥当性が検証された。また各領域における項目においては、全 100 項目中、92 項目で 80%以上の回答者から「妥当である」または「きわめて妥当である」との回答が得られ、内容的妥当性が検証された。「妥当である」または「きわめて妥当である」との回答が 80%以上を超えなかった質問項目について、「妥当でない」または「きわめて妥当でない」と回答したものは、Q2 が 40.0%、Q3 が 44.0%、Q4 が 40.0%、Q5 が 32.0%、Q7 が 32.0%、Q8 が 24.0%、Q18 が 36.0%、Q19 が 36.0%であった。Q1 から Q10 に関しては「姿勢・運動・動作」領域の下位項目となっているが、「高校生以上を対象とした時に観察することが難しい」「項目の意図がよく分からない」といった意見が目立った。このことから、姿勢・運動・動作に関する項目は高校生以上を対象とした場合に観察・評価することが難しく、また必要性が低いことが明らかとなった。CiNii や J-STAGE、Google scholar の検索エンジンで成人の発達性運動協調障害に関する論文を検

索したがそのような論文が見つからなかったことから、高校生以上を対象とした場合に「姿勢・運動・動作」の領域を設定することは対象者の実態を把握するために適切ではないことが考えられる。以上のことから、「姿勢・運動・動作」領域と「メンタルヘルス」領域の内容的妥当性が検証されていない項目を削除し、新たに「心と体の健康」領域としてこれらの 2 つの領域の項目を統合した。これは、心と身体は相互依存的関係であるという「心身相関」の考え方をもとに設定した(太田・沼館・金ら、2017)。更に、専門家協議により各項目の表現や内容を調整し、評価者が正確に評価できるよう項目の修正を行った。これにより、Scale C^3 の最終試案について、全ての下位領域に含まれる項目は合計 92 項目、総合点数は 460 点となった。

今後は、専門家の主観に委ねられており科学性に欠けることが欠点とされている(村上、2006)内容的妥当性の検証だけではなく、科学的な信頼性、構成概念妥当性の検証をし、更に領域、項目の精査を行うことが必要であると考えられる。

文献

1) 韓 昌完・沼館 知里・呉屋 光・照屋 晴奈(2018) 切れ目のないキャリア教育のための評価尺度(Scale for Coordinate Contiguous Career ; Scale C^3)の開発. Journal of Inclusive Education, 4, 1-20. doi: 10.20744/incleedu.4.0_1
2) 韓 昌完・太田 麻美子・權 偕珍(2016) 通常学級に在籍する IN-Child(Inclusive Needs Child:包括的教育を必要とする子)Record の開発. Total Rehabilitation Research, 3, 84-99. doi: 10.20744/trr.3.0_84
3) 太田 麻美子・沼館 知里・金 彦志・韓 昌完(2017) 特別支援教育の専門家養成プログラムにおける障害児・者の心理・生理・病理に関するカリキュラム評価 INDEX 開発のための基礎的研究－知的障害・肢体不自由・病弱を中心に－. Total Rehabilitation Research, 4, 34-46. doi: 10.20744/trr.4.0_34
4) 村上宣寛(2006) 心理尺度のつくり方. 北大路書房.

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.6.0_33
Total Rehabilitation Research, VOL.6 33-44

ORIGINAL ARTICLE

The Verification of Content Validity of Scale for Coordinate Contiguous Career

Chisato NUMADATE[1)2)] Haruna TERUYA[3)] Mari UMEDA[4)]
Changwan HAN[3)*]

1) Graduate School of Education, University of the Ryukyus
2) Kagamigaoka Special Education School
3) Faculty of Education, University of the Ryukyus
4) Faculty of Education, Miyagi Gakuin Woman's University

ABSTRACT

Han, Numadate & Goya (2018) has developed Scale for Coordinate Contiguous Career (Scale C^3) for the evaluation and support for adolescents and adults after compulsory education. In this research, we aim to verify the content validity of Scale C^3. In order to verify the content validity, a questionnaire survey was conducted for high school, university and company career education personnel. As a result of expert survey, all experts responded that Scale C^3 area is valid. And regarding the item of Scale C^3, 90% of experts responded that 92 items out of 100 items are valid. Based on the results of this survey, eight items that 80% of experts did not respond that they are valid were excluded from Scale C^3. The final draft of Scale C3 was composed of 92 items in 16 areas. As future research, it is necessary to collect data using the draft prepared in this research to verify the reliability and the validity of the composition concept.

＜Key-words＞
career education, Inclusive Needs Child(IN-Child), Scale C^3, content validity, expert survey

Received
May 14, 2018

Revised
June 6, 2018

Accepted
June 12, 2018

Published
June 30, 2018

*Corresponding author: hancw917@gmail.com (Changwan HAN)
Total Rehabilitation Research, 2018, 6:33-44. © 2018 Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Masahiro KOHZUKI Tohoku University (Japan)

EXECTIVE EDITORS

Changwan HAN University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Daisuke ITO
Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)

Eonji KIM
Miyagigakuin Women's University (Japan)

Giyong YANG
Pukyong National University (Korea)

Haejin KWON
University of Miyazaki (Japan)

Hitomi KATAOKA
Yamagata University (Japan)

Hyunuk SHIN
Jeonju University (Korea)

Jin KIM
Choonhae College of Health Sciences (Korea)

Kyoko TAGAMI
Aichi Prefectural University (Japan)

Makoto NAGASAKA
KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)

Masami YOKOGAWA
Kanazawa University (Japan)

Megumi KODAIRA
International University of Health and Welfare Graduate School (Japan)

Minji KIM
National Center for Geriatrics and Gerontoligy (Japan)

Misa MIURA
Tsukuba University of Technology (Japan)

Moonjung KIM
Korea Labor Force Development Institute for the aged (Korea)

Shuko SAIKI
Tohoku Fukushi University (Japan)

Suguru HARADA
Tohoku University (Japan)

Takayuki KAWAMURA
Tohoku Fukushi University (Japan)

Yoko GOTO
Sapporo Medical University (Japan)

Yongdeug KIM
Sung Kong Hoe University (Korea)

Yoshiko OGAWA
Teikyo University (Japan)

Youngaa RYOO
National Assembly Research Service: NARS (Korea)

Yuichiro HARUNA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Yuko SAKAMOTO
Fukushima Medical University (Japan)

Yuko SASAKI
Sendai Shirayuri Women's College (Japan)

EDITORIAL STAFF
EDITORIAL ASSISTANTS

Mamiko OTA Tohoku University / University of the Ryukyus (Japan)

Sakurako YONEMIZU University of the Ryukyus (Japan)

as of April 1, 2018

Total Rehabilitation Research
VOL.6 June 2018

© 2018 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
#216-1 Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, 903-0213, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Total Rehabilitation Research
VOL.6 June 2018

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Intervention Through Nutrition Improvement and Exercise Programs of Multi-professional Collaboration for Users of Fee-based Assisted Living Homes for the Older People
Yuko FUJIO, et al. 1

Analysis of Factors Affecting the Teaching of Children with Needs for Listening Ability: Focusing on Attention Deficit / Hyperactivity Disorder Traits in IN-Child Record
Aiko KOHARA, et al. 14

Effects of Psychological Factors on Exercise Capacity for Patients with Peripheral Artery Disease
Kyousuke EHARA, et al. 22

The Verification of Content Validity of Scale for Coordinate Contiguous Career
Chisato NUMADATE, et al. 33

Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to Specific Learning Disorder
Mamiko OTA, et al. 45

ACTIVITY REPORT

Effects of Watching Favorite Video during Exercise on Exercise Economy and Autonomic Activity : A Pilot Study with Healthy Adults
Reika KUDO, et al. 73

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan